
けいおん！Cross of Lives!

鮮血の刻印 & 伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ Cross of Lives！

【Zコード】

N9472M

【作者名】

鮮血の刻印&伝説・改

【あらすじ】

廃部寸前となっていた軽音楽部。

そこに唯、澪、律、紬の4人が入部し、さらに半ば流れで入部する事になった日暮遼祐。

さらに唯に誘われ入部した灘宮英樹。

これはそんな軽音部が送る、ゆるゆるだけど楽しいスクールライフ。鮮血の刻印氏の「けいおん！ Fragment」と伝説・改の「けいおん！ LOVE！ LOVE！ LIVE！」がまさかのコラボ！

登場人物紹介（オリキャラ）（前書き）

ネタばれ注意

原作キャラも、いつか入れる予定です。

登場人物紹介（オリキャラ）

【本作の主人公】

名前：灘宮 英樹
なだみや ひでき

詳細：軽音部唯一の上級生。主人公の一人。

クラスでは、幼馴染みの4人（悠斗、直衛、怜奈、深鈴）と一緒にいる事が多い。

時々言葉にうるさかつたり、思考が変な方向になつたりする。
本人や友人曰く、普通の人よりズレているらしく、本人も自覚がある。

唯や憂とは小さい頃から仲が良い。

元々は、引っ越してきた英樹と、唯が仲良くなりたい一心で近付き、いつも世話をしてくれる事から、兄として慕われるようになつた。

幼馴染みの4人とは仲が良く、武道の仲間もある。
勉強を教え合つたり、組手をするのは最早日常茶飯事。

ちなみに、原因は不明だが、18禁、
もしくは女性の下着などを目にすると吐血するという特異体质を持つている。

兄の翔影と、兄嫁の詩織の影響で科搜研に勤める事を夢見ている。

授業中の暇な時間には、数独をやつたり、兄と義姉からの課題をこなしている。

イメージCV 石田 彰

『テイルズオブエターニア』 リッド・ハーシェル役
『ガンダムSEED』、『SEED DESTINY』 アスラン・ザラ役

名前：日暮 遼祐
ひぐらし りょうすけ

詳細：数少ない軽音部の男子生徒で一年生。主人公の一人。

熱血漢と冷静沈着とお調子者を足したような性格で、基本的には静か。ツツ「ミ役だが、基本ボケ担当。

女の子には非常に優しいが、男は一部人物を除くと扱いが悪い。クラスでは主に浩史や唯と一緒にいる事が多い。

中学の時にバスケ部に所属していたが、練習のしきりで右肩を壊して退部した過去がある。

大の女好きで、エロ大王。しかし女の子の嫌がる事は基本しない。
(覗きなど)

また、実際にそういう事に直面すると中々前に進めないと言つ纖細(?)な一面がある。

かなり妄想癖の持ち主。また、ゲーム・アニメオタクで彼の言動からその深さが伺える。

イメージCV 前野 智昭

『WHITE ALBUM』 藤井冬弥役

『アマガミ』 橘純一役

【主人公の関係者】

名前：天霧 悠斗
あまぎり ゆうと

詳細：英樹との親友で家も近く、小さい頃は、人見知りな英樹と他の人の緩衝材的な役割を担っていたが、今は英樹が他人と関わる事をさけるようになつた為、そんな事は無くなつた。

冷静な性格からか、今も昔も変わらず、英樹達4人の纏め役をしている。

イメージCV 櫻井 孝宏
『テイルズオブグレイセス』 アスベル・ラント役
『コードギアス』 枢木スザク役

名前：騎龍 直衛
きりゆう なおえ

詳細幼馴染み組の中では最も活動的な少年。

英樹によく様々な事を相談しているので、逆に彼からも相談を受ける事があり、信頼されている。

成績を常に心配している為、勉強を怠る事は無い

イメージCV 杉山 紀彰
『Fate/stay night』 衛宮士郎役
『NARUTO ナルト』 うちはサスケ役

名前：空迅 くうじん 怜奈 れな

詳細：深鈴の母親と自分の母親の仲が良く、その影響からか2人も大の仲良しとなつた。

家が空手の道場の為、5人の中では最も強い。自分とほぼ同じくらい強い英樹とは他の男子2人以上に仲が良いので、彼の弱点を熟知している

イメージCV 中原 麻衣

『テイルズオブヴェスペリア』 エステル役
『魔法少女リリカルなのはStrikerS』 ティアナ・ランヌ

ター役

名前：閃堂 せんどう 深鈴 みすず

詳細：普段はおつとりしている心優しい少女だが、組手の時には自分の力を遺憾無く發揮する。

5人の中では一番の心配性である反面、皆に絶対的な信頼を寄せている。

たまに抜けている所があり、相手を励まそうとして失敗する事がある。

イメージCV 能登 麻美子

『CLANNAD』 一ノ瀬ことみ役
『乃木坂春香の秘密』 乃木坂春香役

名前：氷狩　凍夜

詳細：英樹ら5人が高校で新たに仲良くなつた少年。

普段はふざけているが、それは彼の本性では無く周囲を楽しませる為のもの。

学校行事がかなり好きで、積極的に参加する。

イメージCV 小野坂 昌也

『テイルズオブシンフォニア』 ゼロス・ワイルダー役

『M A R メルヘヴン』 ナナシ役

名前：灘宮 翔影

詳細：英樹の兄で、警察官。

捜査一課に勤めている。

詩織とは高校生の頃に出会い、付き合い始めた。

さすがは兄なだけはあり、英樹の事を良く知っている。自分の事以上に、英樹や詩織を心配している。

イメージCV 鳥海 浩輔

『テイルズオブヴェスペリア』 ユーリ・ローウェル役

『薄桜鬼』 斎藤一役

名前：灘宮 詩織

詳細翔影の妻であり、英樹の義姉。

捜査三課に勤務している。

英樹が科搜研に勤めたいのを知り、課題を提供する。

人の領分にあつさりと入つてくるが、それは相手を心配しての事。仕事場だけで無く、近所からも評判が良い。

イメージCV 伊藤 静

『ハヤテのごとく!』 桂ヒナギク役

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』 オットーネディード役

名前：門村 浩史

詳細：遼祐の親友で幼馴染。幼稚園の頃からほとんど同じクラス。

陸上部に所属しており、脚が非常に速い。

落ち着いた性格で物静か。

純粹に優しいのだが、人の恋愛を面白がつたり中途半端に応援したりと嫌な一面もある。

成績はトップクラスで、運動神経もいい上と言つ典型的な優等生。

イメージCV 下野紘

『ラーゼフォン』 神名綾人役

『コーパスパーティー ブラッドカバー リピーティッドファイア』

持田哲志役

名前：日暮 雪紅

詳細：遼祐の姉。大学4年生。

かなりのゲータラで家事がまともにできない。その癖金錢面ではぬ

かりがない。

身勝手でいいかげんな性格が災いしてか、彼氏がまったくできない
といつも愚痴をこぼしている。

また、遼祐とは些細なことで喧嘩をする仲なのだが、実際はちゃんと
見守っている様子。

イメージCV 斎藤千和

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』 スバル・ナカジマ役

『ケロロ軍曹』 日向夏美役

第一話「始まりが始まる時」（灘宮英樹（あだむらおき）著（前書き））

英樹側の話です。

けいおん！Fとは若干ですが仕様を変えています。
悪しからず。（鮮血の刻印先生より）

第1話「始まりが始まる時」（灘宮英樹S·P·D）

けいおん! Cross off Lives!

第1話 「始まりが始まる時」

暖かい朝。

俺は一人で桜ヶ丘高校への通学路を歩いていた。
周りには誰もおらず、ただ桜が舞い散るだけだった。

「ふわあ～あ。

眠い・・・。」

欠伸をしながらのんびりと歩く。

今朝は朝早く仕事に出る兄と兄嫁、（つまりは義姉）に朝食を作ったので眠い。

木々から降り注ぐ木漏れ日あたりながら歩くのは心が落ち着く。
そして、ボーッと空を見上げる。

（遅刻しそうなのに、何故かのんびり歩きたくなる暖かさだなあ。）

再び歩き出した時、背後から足音が聞こえてきた。

そして、話しかけてきた。

「えっと、すんません!」

振り返ると、同じ桜ヶ丘高校の制服を着た男子生徒だった。
ネクタイの色が自分と違っていたので、1年生のようだ。

「どうかしたか?」

ふむ、イケメンだな。

もしかしたら妹の好みかも。

まあ、妹と言つても血は繋がつてないけど。

「えつと、桜が丘高校へはこのまま真っ直ぐ行けばいいんっすか！」
？」

「ああ、そりだけど？」

「おおい・・・。まさか高校への道を覚えてないのか？妹も迷子になつてないだろうな？ まあ、どこの中学校かは知らないけど。

確か今年一年生のはずだ。

「ありがとうございます！」

彼は先に駆け出した。

「偉く急いでたけど、どうしたんだらうか？
って、俺も遅刻だらうが！」

焦りを覚えるが、それでものんびりペースを止めはしなかった。

「あれ？

まだこんな時間かよ・・・。

チツ、間違えるとは情けなくて涙が出そうだ。」

学校に到着し、大きな時計を見ると、時間にはまだまだ余裕があつた。

「なんでこんな時間に来ちまつたんだろう？」

理由を考えるが、どうしてもわからない。

「しまつたなあ・・・。

暇潰しなんて何もないぞ。」

頭を搔きながら、辺りを見回す。

「あ。あそこの樹の上で寝るか。」

俺は樹の上に登り、1つ欠伸をしてから眠りについた。

しばらくして、どこからか男女の声が聞こえてきた。
距離があるため、はつきりとは聞き取れなかつたが、
女子の方の声には何故か懐かしい感じがした。

「どうし？」 「いや、なんで い。 んじゃ行こうぜ。」

やがて声が聞こえなくなつた後、よしやくハッキリと田を覚ました。

「やべ、どれくらい寝てたかな？」

言いながら時計を見る。

うん、遅刻するには問題ない時間だ。

いや、それってヤバい時間帯つて事じやん！

「こよど。」

木から躊躇にもなく飛び降りる。

こんなので恐怖は感じない。むしろ友人と組み手をしている時の方が怖い。

「英樹、そろそろ始まるわよ。」

朝のHRを終え、空を見ていた俺に、空迅怜奈が話しかけてきた。
誰だ？ 「ちえつ、遅刻しなかつたのか」とか言つたの？
残念ながら俺そんなキャラじゃないんだ。悪しからず。

「はいよ。」

「女に世話をされてどうするんだよ・・・。

彼女できねえぞ。」

彼は騎龍直衛。

俺とは中学からの付き合いでだ。

ちなみに怜奈とは高校になつてから。

「彼女なんてまだ早いだろ。」「欲しいと思わないのか?」

「いや、まつたく。

そもそも彼女の必要性がわからない。「また変な思考になつた・・・。」

どうやらこれが俺の欠点らしい。

思考が普通よりもズレテいる部分が見受けられるのだ。
まあ俺は気にしてないし、他にも欠点があるけど。
その欠点とは・・・

「英樹、『冷える』と『冷める』の違いつて何?」

話しかけてきたのは、怜奈の親友で俺とは幼馴染の閃堂深鈴せんどうみすけだ。

「ああ~、やつちやつた・・・。」「深鈴、止めてつて言つたのに・・・。」

直衛と怜奈が頭を抱えていた。

「えつと、『冷える』つてことは『常温のものがさりとて冷たくなる』事で、

『冷める』は『熱いものが常温になる』事だ。」

「なるほど。 ありがと。」「

深鈴はお礼を言つが、この後が大変なのだ。

「ちなみに、『冷たい』というものの語源はだな・・・。」

「ストップ！」

語りだすと止まらないんだから。」

怜奈が呆れている。

そう、これが俺の欠点で、言葉に關して時々うるさいのだ。
時には今のように友人の質問に答え、そこから関連性のあるものを語る。
時には教師の間違いを指摘して、そこから関連性のあるものを語る。
時には丁々yalじMやうにケチをつけて、そこから関連性のあるものを語る。

と言つ訳だ。

自負してはいるのだが、どうしても抑えられない。
さて、下らない式がとつとと終わる事を祈るか。

「英樹、お前、2年生にもなつて部活に入んないのかよ？」
教室に戻り、机に突つ伏している俺を揺すっているのは、

天霧悠斗だ。

家が近く、俺の考えを時々読心術を駆使して読み取る事がある。
なんにせよ友人に変わりはない。

「別にいいだろうが。

俺の自由だろ。」

「ひつやつて二ートが出来るのかしら？」「部活やつてないだけ
で！？」

「アルバイトで時間が取れないの?」 「いや、やうじやなこなごど。」

「「「アルバイトで時間が取れないの?」 「いや、やうじやなこなごど。」

「じゃあ何で?」 「メンディー・・・。」

「「「そんな理由が認められるか!――」」

悠斗と怜奈、更にはおとなしい深鈴にまで言われた。

「認めてくれ。」「無理だろー。」

「だつて、やる気が起きるよつた部活なんてないし。」「あつや。」

「無理に説得してこない所がとてもありがたい。」

(まあ、既に話の話の事もわかるし、忘れなかつたら探してみよつ。) そつ胸に決めたまでは良かったものの、帰りには既に忘れていた。

数週間後の4月下旬。

昼休みの2年3組で、俺は悠斗と昼食を共にしていた。

「で?」

「なんか部活は探したのか?」「いや、それが・・・。」

口籠る俺を見て、悠斗は嘆息した。

「スマン。」

「。あいつは毎回時々泣かせちまつただよなあ。」

「いつもそれだな、お前。

なあ、だったら軽音部に入れば？」

「軽音部？」

いや、そんなんねえだろ？」

「それが、今部員を募集してるらしいんだよ。

お前、ベース弾けたじやん。」

「やうだけど……。」「

「見学にでも行って来いよ。」

ああ、そういえば今日の5限目、保体だぞ。」

「マジで！？」

死にたくねえ・・・。」「一年の時と同じ先生だから屋上にい
れば？」

「やうする。」

俺は早々にクラスから出て、屋上へと向かう。

保体の授業はスルーしても良いと、校長から許可はもらつていて。それには俺の奇妙な体質が関わっている。

周りの男からは可哀想にな、とか言われるが、俺は逆に助かっている。

この体質を恨んだ事は一度もない。

いつからかは知らないが、子供の頃からこの体質がある。

ちなみに、その体質といつのは、18禁を出すと吐血するとい
うものだ。

それは18禁に限った事ではないのだが。

まあ簡単に至極平たく言つと、年相応の男が喜ぶ事で吐血するのだ。

「風が気持ちいいな。」

屋上に出て、風を一身に受ける。
さて、どうやって時間を潰したものか。

「寝よ。」

置いてある長椅子に身を預け、瞼を閉じる。

（そういえば、さつき木の上で聞いたあの声・・・。
誰だつたっけ？ とても大切な奴だった気がするんだけど、思い
出せねえや。）

次に田が覚めた時、俺はまだ夢の中にいるかと思った。
そりゃそうだ。

5時間田だけのつもりが、6時間田、
果ては帰りのJRまですっぽかしてしまったのだから。

「ついてねえなあ・・・。」

うなだれて教室へと戻る。

その後すぐに鞄を持って職員室へと向かつ。
授業をサボつたのだ。 謝らない馬鹿がどこにいるところのだろう
か。

「すみませんでした。」

90度近く身体を曲げて謝罪する。

「じゃあ、これを4階の視聴覚ホールに運んでくれ。」

先生が段ボールを叩く。

2つ程度なら大した重さではないだろう。

まあ、中身によるけど……。

「はい……。」

素直に従う。

逆らう理由もないし、それを行う必要性もわからないからだ。

「よこしょ。」

軽々と持ち上げる。よかつた、大した重さじやなくて。

しかし俺、よく先生に何かを頼まれるなあ。

別に見返りを求めて手伝いをやつしているわけではないが。

偶々、偶然、俺がその場にいたから頼まれる。

その偶然がほぼ毎日起こり、いつの間にやら俺は先生の手伝い役が定着していた。

ここまで偶然が重なると逆に怖いけど。

さて行くか。

そう考えて視聴覚ホールへと向かおうとするが、俺はある重大な事に気付く。

それは……。

「先生、視聴覚ホールってどこですか?」 「灘宮、2年生だろうが……。」

「すみません。

高校に入つてから一度も使つてないんで。」「まったく……。」

先生が説明してくれた道順を反芻しながら視聴覚ホールへと歩く。

エレベーターを使ってもよい言われたが、歩く方が好きなので歩きで向かう事にした。

「ここか。」

段ボールを扉の脇に置き、場所の確認を行う。
ここで間違ついたらヤバいし。

「問題無しつと。」

中に入つて、段ボールを所定の位置に置いて部屋を出た。

「する事もないし、とつとと帰るか。」

階段を1人降りて行く。

ふと、踊り場から窓から外を見ると、様々な運動部が練習に励んでいた。
笑い合つている部員達を見て、英樹は何故か寂しい気持ちに包まれた。

彼らは充実した日々を送つてゐる。だが自分はどうだ?

とても充実しているとは言えなかつた。

もちろん親友がいて楽しいのだが、それだけでは満たされない『何か』があつた。

別に、それが部活をやつていれば満たされる訳ではないのだが、自分だけ他の皆と別の世界にいるような錯覚に陥る事があつた。
それに、英樹自身人と関わるのがあまり好きではなかつた。

その為、部活を恐怖していた。

(馬鹿馬鹿しい・・・。

考えた所で、答えなどであるはずもない。)
再び歩き出した英樹の前に、女の子が現れた。
茶髪の髪をヘアピンで留めた子だつた。

「お兄ちゃん?」 「あ?」

俺の事を『兄』と慕つてゐるのは2人の妹だけだ。

「唯?」 「お兄ちゃん!」

妹、もとい唯が飛びついてきた。

「うおつと。

階段の踊り場だったからよかつたものの、いきなり抱きつくな。
他の人に迷惑がかかるし、お前も怪我したら大変だろ?」

「だいじょーぶ!

お兄ちゃんが必ず受け止めてくれるもん!」

相変わらずの理由にならない理由。

だが、唯が言つと本当にそんな感じがする。

「久しぶりだな、唯。」 「うん!」

「とりあえず、ほら動くな。

涙拭いてやるから。」

言いながら、ハンカチで唯の涙を拭つてやる。

「えへへ

「ありがとう、お兄ちゃん。」

唯の笑顔は小さい頃とまったく変わっていなかつた。

何故だか彼女の笑顔を見ると、こちらも自然と笑みがこぼれる。

「俺が上げたヘアピン、まだ使つてくれてたのか・・・。」

「うんー

あ、憂もね、お兄ちゃんから貰つたりボンをまだ使つてるよ。」

「そつか。」

久しぶりに妹と再会し、懐かしい想いに包まれた英樹は、優しく唯の頭を撫でてやる。

「やっぱつあつたかいね、お兄ちゃんの手。」

「心は冷たいぞ。」「そんな事無いよ。」

「あー

ねえお兄ちゃん。お兄ちゃんつてどーか部活に入ってる?」

「いや、やる事が見つからなくてな。
どーにも入つてない。ただ時間を浪費しているだけだ。」

「じゃあさ、じゃあさ。

軽音部に入る?よー」「軽音部?」

「うんー

私も入つたんだけど、スッゴク楽しいのー。」

(唯も、自分のやりたい事が、打ち込めるものが見つかつたんだな。)

顔をほころばせ、英樹は感慨深いものを覚える。

小さい頃の唯は、自分のやりたい事にいつも悩んでいた。
見つかつたとしても、それが持続する事はあまりなかつた。

「まあ、見学してみてからだな。」「じゃあ、早速行こうー。」

唯はやつぱりて俺の手を引つ張つた。

「い、今からか！？」 「善は走れつてよ。」

「それを言つなら善は急げ、だ。」 「いやあ～。」

俺の描描に、唯は照れている。

（しかし唯の奴、しばらく見ない内になんか変わつたような？
7年ぶりだもんな。変わつて当然か。）

顔をほころばせると、唯がいきなり立ち止つた。

「どうしたんだ、唯？」 「音楽室つて、どうだつけ？」

「アツハハハハハ。

相変わらずだなあ、唯は。」「むう～、これでもちやんと成長したよ！」

笑つてゐる俺に、唯がポカポカと叩いてくる。

「ゴメン、ゴメン。

じゃあ、一緒に行くか。」「うんー、お兄ちやんー。」

俺が出した右手をしつかりと握り返す唯。

小さい頃もこんな事が多々あつたなあと想つ出で、また笑みがこぼれた。

「ほり、じだろ？」 「うんー、ありがとつ。」

唯が扉を開く。

「ただいま～、皆。」「おかえり、平沢。」

中に入った男子生徒が唯を迎える。

ん？あの男子生徒、どこかで……。
まあ気のせいだろ。

そもそも俺が見知らぬ人をいつまでも覚えてるはずがない。

「あれ？」

「唯、そちらの人は？」 「この人はねえ……。」

「おおーっ！」

「新入部員ですか！？」 「これで一気に3人増えるな！」 「良
かつたです！」

最後まで人の話を聞かずに、3人の女子が喜んでいた。

「いきなり何を言つてているんだ？」

「是非軽音部に入つてくれ！」
力チュー・シャが懇願している。

上下関係を意識していらない奴だな……。
俺自身先輩らしくないけど。

「律、そんな言葉づかいじゃ失礼だろ！」 「ふざやつ！？」

尚も俺を勧誘する力チュー・シャの頭を、黒髪の子が思い切り殴る。

（これって逮捕できんのかな？）

現行犯の黒髪の子を見ながらそんな事を考える。
うん、我ながら馬鹿だと思うほど思考がズレテる。
普通は痛そうとか思うんだろうけど。
唯の影響だろうか。 アイツも時々ズレテたからな。

「すみません、先輩。」

金髪の子も謝罪する。

「気にする事は無い。

気付いてくれればそれでいいんだ。」

彼女達に苦笑いしながら答える。

「階、この人は私のお兄ちゃんだよ。」

「「「お兄さんー?」」「」

「驚く事なのか?

まあ、そうは言つても本当の兄妹じゃないけどな。」

「あ、ここに来ますからビーフ。」

金髪の子が椅子を引く。

「わざわざありがとつ。

灘宮英樹だ。 よろしく。」

「軽音部、部長!」

田井中律です。」「幼馴染の秋山澪です。」

「琴吹紬です。」「田暮遼祐です。」「平沢唯です。」

「唯はわかってるから。

えつと、唯とは家が近かつた関係で、

小さい頃だけ唯とその妹の憂が兄として俺を慕っていたから。兄と呼ばれるようになつたんだ。」

「でね、お兄ちゃんに軽音部に入つて欲しいの！
お兄ちゃん、確か何か楽器を弾けたよね？」

「一応、ベースなら弾けるけど。」「あの、左利きですかー!?」
澪が乗り出していく。

この子、もしかしてレフティか？

だとしたら悪いな。

「すまん。右利きだ。」「そ、そうですか・・・。」
よほど同じ苦労を分かち合える人が欲しかったのだろう。
澪はショーンボリする。

「でも、先輩が入部すると、律ちゃんは部長じやあなくなっちゃう
けど・・・。」

紺の指摘に、律は頭を抱え込む。

「部長はやりたい！

だけど部員は欲しいー！

私は、私はいったいどうすれば・・・。」

そんなに葛藤する事なのだろうか？

と言つて、なんだか入部する流れになつてゐるし・・・。
俺はあまり人に強く言えるタイプじゃないからな。
後になつて後悔するパターンが多い。

まあ人生で後悔する方が圧倒的に多いけど。

「入部してもいいけど、一つだけ条件がある。」

「条件、ですか？」「ああ。」「遼佑が首を傾げる。

彼の方を見ると、考えが少し伝わってきた。

まさか！ 僕を排除してハーレムにしろとか言つのかああああー？

とか考へてゐるようだつた。

そんな訳ないだらう・・・。

むしろ男が俺一人じやあいたたまれないからいてほしいぐらいだ。

「俺に何の役職もつけない事が条件だ。

部長も副部長も経理とかも、一切俺はやりたくないんだ。

それを誓つなら入つてもいいぞ。」

「「「「それだけ！？」」「「「「ああ。 それだけ。」

だから何故驚く？ ダメだ。 理由がわからない・・・。

「是非お願ひします！」

律が頭を下げる。

しつかりしてゐるのか抜けてゐるのかわからない奴だな。

「わかった。

入部しよう。」

「「「「やつたあーっ！－！」」「「

5人はとても喜んでいた。

彼女達となら、もしかしたら埋められない『何か』を、

『空白』を満たせるのかもしない。

俺は何故か、そんな事を感じていた。

第1話 「始まりが始まる時」 了

第1話「始まりが始まる時」（灘宮英樹 S·Ikegami）（後書き）

軽音部員達と、クラスの友人達との接し方が違うのは、場所や年齢、相手によって無意識に接し方を変えていくからです。私もそうでした。（鮮血の刻印先生より）

第1話「出会いーそして入部ー」（日暮遼祐 S.p.e）（前書き）

遼祐側の視点です。

特に注意する事はありませんが、一部分だけけいおん」「ーから
変更しております。

第1話「出会いーそして入部！」（日暮遼祐 S.p.e）

舞い散る桜はとても美しく、だけじその命はわずかしかないと思うと、なんか切なく感じる。

だが俺はそんな事気にしている場合ではなかつた。俺は今猛ダッシュをして学校へ向かつてゐる。

桜が丘高校……今日から俺が通い始める高校だ。だがその初日にはんとバカ姉貴のせいに大遅刻をしてしまつてゐる。出た時には既に8時だつたのでさつさと行かねば入学式に間に合わない。急げ、急げ俺！！

「……あ」

一つ思い出した事がある。

……高校どこにあるんだっけ？

しまつた、春休みにのんびりしそぎたせいか、高校の場所を忘れてしまつた。

冗談じやない、遅刻した拳句迷子！？」んなかつに悪い事つて果たしてありえるのだろうか。

落ち着け、落ち着くんだ俺。クールになれ日暮遼祐。俺はそんなバカな男じやないだろ？

……思い出せない。

ふと、目の前にはのんびりと歩く男子生徒の姿が。制服を見る限り同じ桜が丘高校だ。

俺はそいつに駆け寄り、声を掛ける。

「えつと、すんません！」

「どうかしたか？」

髪が結構長くて、顔はイケメンに入るだるうな顔立ちだつた。

つと、そんな事を気にしている場合じやない！

「えつと、桜が丘高校へはこのまま真つ直ぐ行けばいいんつすか！」

？

「ああ、やうだけど？」

そういうと俺はその男に笑顔でお礼をいい、急いで高校へ走る。つてあの人ネクタイの色違つてたなあ、ひょっとして上級生？その前にあんなにのんびりしてていいのだろうか？……ああ、あの不良なのか。だから遅刻しても平気と思っているんだ。勝手に納得すると、俺は急いで高校へ向かった。

……その後、8時と示した高校の時計を見て、俺は愕然とした。あの人、言つてくれればいいのに。

俺は道を教えてくれた親切さを忘れて、俺はさつき出会った上級生の人たちと怒りを覚えながら、高校の門をくぐった。

何故か知らんが俺は今高校の裏にいる。

いや、特に理由は無い。暇だからだと思う。そんだけだ。そして校舎の裏の大きな樹の下を通ろうと思つた時だつた。

「……………何してんだあいつ」

樹の下に、女子生徒が一人しゃがんで何かを見ていた。俺は少しづつ歩み寄り、その女子生徒の後ろに立つ。全然気づかねえし。

「お~い

……返事がない。ただの屍の様だ。

「もしも~し」

背中がピクッと反応し、こっちを振り向いてくる。

……あ、可愛い。つてそうじやない。

髪の毛は焦茶色でショートカットだ。2本のヘアピンで右の前髪をとめていた。

「なにやってんだ、こんなとこりで？」

「てんとう虫だよ、ほらー」

そういうと、女子生徒は指の先でとことこ歩いててんとう虫をこちちに見せる。

……小学生か」こつは。

そしてじょりくするとてんといつ虫はね高くへ飛んで行つた。

「お前、1年生？」

「うん」

制服のリボンが青なので間違いない。

俺はふとデジタル型の腕時計を見た。そもそも教室へ行かないと言はばそうな時間だ。

「そもそも教室……ってかクラス表見に行こうぜ。あ、クラス表見たか？」

「ううん。わたしも見てないから……あ、わたし平沢唯

「俺、田暮遼祐。同じクラスになつたらよろしくな

「うん、りょうくん！」

「うん、遼祐だからりょうくん？」

「りょうくんか。りょうく

「うー

「りょうくん……、りょうくん……。

頭が痛くなつてきた。同時に誰かがりょうくんつて言つ声が聞こえてくる。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。んじゃ行くぜ平沢」

「うん！」

俺たちは一緒にクラス表を見に行つた。

それにしてもなんだつたんださつきの？

……ふと、俺は樹の上を見た

何かがいたような気がしたが、猫だろ？と思いつつ、俺はてくてく進んでいる唯を追いかけた。

「えーと、俺の名前は……あ、3組か。……つて、お前も一緒にクラスだぞ」

「えつ！？りょうくんと同じクラス！？わーいわーい！」

そこまで喜ぶことか？まあいいか。

教室の場所を確認し、俺たちは1年間勉強することになる教室へ向かつた。

さて、教室を見つけるだけで25分も費やしてしまつた俺たちは教師へ到着する頃には既に俺たち以外の生徒の皆さまは席へおつきになられていた。

……恥ずかしい。

そう思いながら平沢と共に席についた。

たまたまなのか、偶然なのか、運命なのか、俺の後ろは平沢だった。まあ名字も同じ『ひ』だし。近いのは当り前か。と言つ事で答えは『当り前』だ。

え？選択肢はない？固い事言うなよ。たかがクイズだろ？

……『ごめん、これ言いたかっただけなんだ。

席へついてしばらくすると担任らしき人物が教室へ侵入してきた。

女性で正直言うとあんま美人ではなかつた。

なんだよ、俺はてっきり高校の女性教師っていうのは美人ばっかりだと思つてたのに……。

「えーと、皆さん。入学おめでとうございます。自己紹介を始めたいところですが入学式が始まるため、これから体育館へ移動します」うわあ、入学式だ。俺の嫌いな行事ベスト3を万年キープしてる奴だよ。

「めんどくせえなあ、サボるか」

小声で後ろにいる平沢に話しかけた。

「駄目だよ、ちゃんと出ないと怒られちゃうよ」

怒られるのが怖くてサボれるか。

と男が相手ならやついいたいところだが、初日だし、真面目に式に出来る事にした。

平沢って見た目以上にしつかりしてるんだな。見た目めっちゃふわふわしてそなんんだが。

「……」

「……ぐう……」

隣で寝てこるのは平沢だ。

こいつを真面目な奴だと思った俺がバカだった。
いや、真面目なのは真面目だと思うよ。多分。
だけじゃあ……。

もう溜息しか出でこない。俺はもう誰を起しきれないでおく事にした。

わて、それから時はぶつ飛び数週間後。

……俺は今、軽音部の部室である音楽準備室へ向かっている。
理由？簡単さ。平沢の軽音部の見学……といつか入部するの辞める
つて言いに行くための付き添い。以上。

え？お前は入らないのかつて？何をバカな事を。俺はバンドなんか
しません。
そりやギターなら弾けるけど別にそこまでやりたいくて訳でもない
し。

「……ここだよねえ……？」

いつのまにか部室へ到着。俺たちは扉の前で立ち往生している。

「そうだな。ってか、何故緊張してる」

「だって……入部希望書を出しちゃったのにすぐに辞めるって言つ
たらきっと、白いマイクした人が……ぎやあああーーー」

まったく、お前が人の話を聞かないからだる。

第一なんで白いマイク？どこのクラウーさんだ。

何やらこいつ、軽音楽と聞いたとき、簡単な事しかないと思いこ
んで入部しようと思つたらしい。

簡単な事とは主に口笛とかカスタネットとか。

……アホだ。正真正銘のアホだ。

「……さつさと入つて、辞めるつて言つに行ひげ」

「で、でもー！」

俺は頭を抱えて、溜息をついた。

まったく、もしこいつにお兄ちゃんとか妹とかいたら、そいつらはきっと苦労してたんだろうな。そんな考えが頭をよぎった。

「何か用？」

ふと後ろから声が聞こえたのでふり返ると、そこにはカチューシャをつけた女の子がいた。

……軽音部の子か？ それとも通りすがり？

「あ、もしかして平沢唯さん！？」

そういうと、そのカチューシャは平沢……ではなく俺の手を握った。

……ほえ？

「おまちしておりましたあ～！ いやあ、すごいオーラを感じましたよ～、名前を見るだけで！ 見た目もすごいオーラを感じます！！！」

完全にこいつは俺を平沢と勘違いしてるらしい。

溜息について、握られた手を離した。

「いや、平沢唯は俺じゃなくて……あつち」

「へ？ …… 平沢唯さんですね！ いや～ 見た目からオーラ全開ですね」
棒読みだぞ。そしてそのオーラとやらは誰にでも出てるのかおい。

「んで、そつちは？」

「ああ、俺はこいつの付き添いみたいなも…… 「みんな～、入部希望者が来たぞ～」 …… 人の話を聞かんからあ～！」

完全に無視だ。少女は平沢の手を取り、軽音部の部室である音楽準備室へと連れ去った。

俺も溜息交じりに後に続いた。

「ようこそ軽音部へ！」

「歓迎いたします！」

…… 美女がそこにいた。

黒髪のロングヘアの少女に金髪の少女。

この一人にはまさに美と言う言葉が似合つた。

だが一人は俺を見て、金髪は疑問の目を、黒髪はちょっと動搖していた。

「やぢらの男の子は？」

「俺は付き添いで……」「よーしムギーお茶の準備だあー」…………

……」Jのカチューシャは俺に恨みでもあんのか？

それから数分後、俺と平沢は机に座られ、目の前には紅茶とクリームとフルーツたつぱりのケーキがあった。

「どうぞ、召し上がって」

俺はフォークを取り、ケーキを一口。

「……うめえ！」

つい口に出でしまうぐらい美味しかった。手作りか？是非作り方を教えてもらいたいぐらいのうまさだ。

「平沢さんはどんなバンドが好きなの？」

平沢を横目で見ると、返答に困っていた。

バンドとかどんなのがあるか知らねえのかよ。っていうかバンドって言葉すら分かつてるのか。

「好きなギタリストとかは？」

「おいおい、やっぱいんじゃねえのこれ。

て言つても俺もあんま知らねえしなあ……、アーティストとか声優ならまだなんとか。

「あのっ！」

平沢が突然立ち上がった。

「実は私、本当はギター弾けないんです！しかもホントは県学しこきただけで……」

「ああ、言つちやつた。代わりに俺が言おうと思つたのだが。だがまさかちやんと言つとは……やつぱ根はしっかり者なんだな、こいつ。

「私……本当はもつと違う楽器をやるのかと」

「おいおい、あん時の俺の話聞いてなかつたのかよ！？」なんか悲しくなってきた……。

「どんな楽器ならできるの？」

金髪が聞いた。ナイスフォローだ！

「カスセーハーモニカ！」

「ああ、それならここに……」

「『めんなさいできません』

お前ハーモニカ出来んかったんかい！？

そしてお前は何故ハーモニカを携行している。

さてと、どうするべきか。

あ、そういうば……。

俺は昼休憩に真鍋から言われた事を思い出した。

『え？ 平沢を軽音部へ入れてやるのを手伝ってやれ？』

『うん、あの子……中学の時は部活なんかしてなかつたし、やつぱり、何か趣味が出来れば、きっとあの子も変われるんじゃないかなって』

『はあ……』

『それにあの子……』

『うん？』

『ううん、なんでもない。おねがいできるかしり？』

『まあ……出来る限りはやつてみるよ』

「な、なあ！ 3人とも何か演奏は出来るのか？」

俺も立ち上がり、そういった。

3人の演奏を見れば、何か変われるかもしれない。

「そ、それだ！！」

カチューシャは閃いたように顔が輝いた。

演奏を見れば平沢がもしかしたら入る気になるかもしね。そう思つたから言つてみたんだが。

それから、3人は演奏の準備始めた。

カチューシャはドラムで、黒髪はベース、金髪はキーボードか。

んじゃあ後はギターとかがいるのか。

俺と平沢は3人が楽器の調整をしているところを椅子に座つて見ていた。

平沢は3人の姿を今までにない歓喜と興奮に満ちた目で見つめている。

俺もその姿を見ていた。

楽器か……そいや、俺もギターちょっとこじつてたな。

……いや、いじらされたつていうか。

「よし、始めるか！」

力チュー・シャが準備完了の合図をすると、鉢を上にあげ、

「1、2、3、4……」

4と言った瞬間、同時に演奏が始まった。

曲は翼をくださいだつた。なつかしいなあ、小学校の時これの歌詞変えてよく授業中に歌つて怒られたつけ。

それから2分間、この音楽準備室は翼をくださいの音色でいっぱいとなつた。

やがて演奏が終わると、平沢が急にたちあがつて歓声を上げながら拍手を送つていた。

「えへへ……どうだつた？」

「なんていうか、凄く言葉にしにくいんですけど……」

「うんうん」

入る気になつたか。

これでようやく俺のミッションも……。

「あんまりうまくないですね……」

……追加でミッションを増やすな。

つていうか何故? 何故そういう事をズバッと言つへ。すげえよ。でもそのズバッと言つスキルはもつと別のところで使えよ。国会とか。

「でも、なんだか凄く楽しそうでした」「あれ、言葉が続いてる。

「私、この部に入部します！」

……大佐、任務完了だ。帰還するぞ。

……ぢづやらさつきの演奏は心に強く伝わったらしい。

「やつたああ！4人目だああ！！」

力チュー・シャが喜んでいる。よほど嬉しかったのだろう。さて、俺は帰るか。つと、回れ右をしようとするところ……。

「だあああ、しまつたあああ！」

……大佐、まだ任務が残っていた。

……にやら再び問題発生らしい。

「校則ではクラブ活動は5人以上じゃないと駄目だつたああ！！」

生徒手帳を瞬時に開くと確かにそう書かれてあつた。

……後ろからなにやら視線を感じる。

誰かが、誰かこっちを見ている！！

振り向くと、美女4人が俺の方を見ていた。

その目は入れ入れと言わんばかりの目をしていた。

……本気で考えた。

入る？軽音部に？部活に？……つていつか女ばっかりだぞ？ハーレムだぞ？どつかの救世主がよろこんで入りそなとこだぞ？

第一、楽器は……引けたな。

……よし。

「……よつしゃ、俺も入る」

美女たちの目が入れ入れと言つていた目からやつたあの目に変わった。

さてと……これから3年間、大変そうだな。

苦笑いを浮かべていた俺だった。

「あ、そうだ。毎日おかし食べれるよな？」

「はい、もちろん」

良かった、少なくとも損はないみたいだな。

「あ、わたしちょっとトイレに行つてくるね」

そういうと平沢は扉を開けて部室から出た。

俺はとりあえず壁によりかかつて、一息つく。しばらくするとカチューシャが俺の方に来て、

「えつと……名前なんだっけ？」

「ああ、田暮遼祐」

「田暮はさあ、楽器何ができるの？」

「カスタネット」

「……は？」

「嘘だよ」

カチューシャのキヨトンとした顔が少し笑えた。

俺はつい横を向いて微笑み、

「ギターをちょっとな」

「へへ、ギターか。演奏の幅が広まるなー！」

……俺はふとある事に気付いた。

「なあ、ここって上級生いないの？ 2年生とか3年生は？」

「この軽音部、廃部寸前だったんですよ」

金髪がお茶を淹れながらそう言つた。

通りで新入生歓迎会で軽音部なんて見当たらぬ訳だ。

「二人とも、お茶でもどうですか？」

「お、サンキユームギ」

カチューシャはそういうと上機嫌にテーブルへ向かつて行つた。

俺も後に続こうと、歩こうと思つた時、ドアが開いた。平沢が帰つて来たのか？

「ただいま、皆

やつぱ平沢か。

「おかえり、平沢」

そして平沢の横から上級生

2年生の男子が現れた。

……あれ、この人どつかで……。

「あれ？ 唯、そちらの人は？」

「こJの人はねえ 「おおーっ！新入部員ですか！？」 「これで一気に3人増えるな！」 「良かつたです！」 ……ありや？」
話聞こうぜお前ら。

三人は上級生に駆け寄つて、騒ぎ始める。

……「うん、話は聞ことりあえず。

「いきなり何を言つているんだ？」

ほら見る、困つた事言つてるよ。そりやそうだが。

「是非軽音部に入つてくれ！」

力チユースヤがお願いしている。

…… つて言うか言葉遣い 。

「律、そんな言葉づかいじや失礼だろ！」

「ふきやつ！？」

尚も上級生を勧誘する力チユースヤの頭を、黒髪が思い切り殴る。

ああ、こういうどつき漫才をするような仲なのか。

「すみません、先輩。」

金髪が謝罪する。

見た目なんだかふわふわしてるんだけど結構しつかりしてゐるんだな。

「氣にする事は無い。気付いてくれればそれでいいんだ」

上級生が苦笑いしながら俺たちに答えた。

よかつたよかつた。いい人そうだ。

「皆、この人は私のお兄ちゃんだよ」

「――「お兄さん！？」」

なん……だと……？

そうか、平沢にはお兄ちゃんがいたのか……。

なんか、悲しいなあ……。

つて何故悲しくなる。別に彼氏つて訳じやないのに。

彼氏じやないか。よかつた。

「驚く事なのか？まあ、そつは言つても本当の兄妹じやないけどな

ああそう、んじゃ義兄？連れ子？びつやから平沢は色々と家庭の事情がややこしいらしい。

「あ、ここ空いてますからどうぞ。」

金髪が椅子を引く。彼はそこに座って一息ついた。

「わざわざありがとう。灘宮英樹なだみやひできだ。よろしく」

灘宮英樹……か。

「軽音部、部長！田井中律です！」

「幼馴染の秋山澪です」

ああ、やっぱ幼馴染だったか。

あのどつき漫才は幼馴染じゃないとできないだらうな。

「琴吹紬です」

「日暮遼祐です」

いやいや、お前は知ってるだろ。

心の中でそうツッコミ。

「唯はわかってるから

お、この人ツッコミできるんじやん。

結構フレンドリーな人か。

「えっと、唯とは家が近かつた関係で、小さい頃だけ唯とその妹の憂が兄として俺を慕っていたから、兄と呼ばれるようになつたんだ」ああ、そななんだ。

なんだややこしい家庭の事情はなかつたのか。

一安心、一安心。

「でね、お兄ちゃんに軽音部に入つて欲しいの一ーお兄ちゃん、確かにか楽器を弾けたよね？」

「一応、ベースなら弾けるけど

「あの、左利きですか！？」

と言つと、秋山は左利きなのだろうか？

同じ苦労を分かち合える人が欲しいのだろうか？

「すまん。右利きだ」

「そ、そうですか……」

残念秋山。

右利きと聞くと、秋山はがっかりした。
そこまで欲しかったのか……。

「でも、先輩が入部すると、律ちゃんは部長じゃあなくなっちゃう
けど……」

琴吹の指摘に、田井中は頭を抱え込んだ。

おいおい、そこまでして部長の座が欲しいのかよ。

「部長はやりたい！だけど部員は欲しいー！私は、私はいつたいど
うすれば……」

諦める。そこで灘宮さんが卒業したら部長になればいい。
俺がそう言おうと思つた時だつた。

「入部してもいいけど、1つだけ条件がある」

「条件、ですか？」

なんだら？灘宮さんが人差し指を上げてそつ口にした。
……待てよ、この人も男だ。これほどの美女が4人もいて、でもそ
の中に俺がいる。

簡単に言えば、俺を取り除いて自分だけハーレムに……。つて、
まさか！ 俺を排除してハーレムにしろとか言うのかあああああー！?

……んな訳ないよな。いや、無いと願いたい。

俺は心の中でそう祈り続けた。

「俺に何の役職もつけない事が条件だ。部長も副部長も経理とかも、
一切俺はやりたくないんだ。それを誓つなら入つてもいいぞ」

「……それだけ！？」 「 「 「 「ああ。それだけ」

なんと、働かないと言うのか。この人こそ真のニートじゃないか。
その前にお前ら、それだけってなんて反応してるんだよ。

この人働かないって言つてるんだぞ？ 楽器の演奏だけして後はお茶
だけだぞ？なんて図々しい。

「是非お願ひします！」

お願ひするなよ。せめてなんか役職つけさせろよ。

……」つそり溜息をついて、頭を抱えた。俺はこんな所に入つて大丈夫だったのだろうか。

本気でこの先が心配になつてきた。

まあ上級生だし、部長が田井中つつても最終的にリーダーは灘富さんになるはずだしな。

うんそうだ。俺は納得した。

「わかった。入部しよう」

「…………やつたー！」

こつして、我が桜高軽音楽部にまた新たな部員がやってきた。

灘富英樹……。彼の前には果たしてどんな未来が待ち受けているのだろうか？

……つて、なんでナレーション喋りなんだ。そりや確かに俺が進行しているが。

まあ、確かにこの先どうなるかは気になるけどな。

灘富さんの入部を喜んでいるみんなを見ながら、俺はそう思つていた。

第1話「出会いーそして入部!」（日暮遼祐Side）（後書き）

なお、サブタイトルは英樹側と遼祐側で違います。（二人の視点から見ているだけで、時間軸は同じです）

第2話「軽音部」（灘面英樹Saito e）（前書き）

鮮血

「今更ですが、20話は感動しましたね！
私にはあれを表現する文才など無いので、
今後けいおん！の2次創作を書いても、あそこまで続かないかも。」

「

英樹

「賢明な判断だな。」

鮮血

「少しほは慰めてよー。」

英樹

「それでは第2話をどうぞ。」

鮮血

「聞けよー。」

第2話「軽音部」（灘高英樹Side）

「行つてきま～す。」

俺は家を出て空を見上げた。

雲一つない晴天で、日差しが少し眩しかった。

「英樹くん。」

「何？ 義姉さん。」

まだ家の敷居から完璧に出ていない所で、義姉の詩織が呼び止めてきた。

「これ、今日からの課題。

時間がかかるもいから、やつてきてね。」

「はいはい。」

義姉が渡してきた課題というのは、俺の将来の仕事に関係している。

実は俺の兄と義姉は警察官で、兄は捜査一課、義姉は捜査二課だ。で、俺はと言うとそんな2人に憧れた事と、小さい頃から興味があつた事から、

科搜研（科学捜査研究所）に勤めたいと思つてこる。

それを知つた義姉が、俺に課題を出してくれるのだ。

「さて、行くか。

あれ？ 何か忘れている気が・・・。」

ふと立ち止まり、頭を捻る。

「ああ。ベース、忘れるところだつた。
家に引き返し、ベースを持って行く。

(こんなに抜けてるとマズイな。ちゃんとしなきゃ。)

「英樹？」

「。。。。」

「英樹？」

「。。。。」

「ねえ、英樹つてば！」

「オワツ！？ いきなり話しかけるなよ。。。。」

俺は怜奈を睨む。

「何言つてんの。私はさつきからずっと呼んでたんだけど。
怜奈は嘆息し、俺はその事を知つて詫びる。

「ス、スマン。課題を早く片付けたかったから。」

「あいつが。」

「で、なんの用だ？」

「立て掛けてるそれって何？」

怜奈が俺の机の脇にあるベースのケース指さした。

「ベースだよ。 軽音部に入つたから。」

「軽音部？ 部員は何人？」

「俺を含めて6人。 男2人、女4人。」

「気になる子は？」

「仲間としてなら皆。」

「つまんない・・・。 もっとさあ、英樹の浮いた話を聞きたいんだけど。」

「そんな話は永遠に無いぞ。」

「それは言い過ぎ。」

「俺より直衛に聞けば？」

「あいつ、なんか好きな奴がいるって言ってたし。」

「じゃあ聞いてこよう。」

「あ、これありがとう。」

怜奈が俺にノートを手渡す。

「ちゃんと『』したのか？」

「もちろん。 助かったわよ、次私があてられるし。」

怜奈が手を振つて直衛の所に行く。

すると今度は深鈴がやつてきた。

「英樹へ、私にもノート貸して~。」
涙目になりながら懇願してきた。

「お前もあたるのかよ？ ほれ。」

「助かります。

英樹のノートって、字は綺麗で見易いし、わかりやすいから人気

だよね~。」

「そういやあ、1年の時もテストが近くなつた時、よく貸してくれつて言われたなあ。

俺からすれば深鈴の方がいいと思つけど・・・。」

「謙遜しないの。

それじゃ、借りるわね~。」

足取り軽く戻り、自分の席でさつそくノートを開いていた。

「さて、そろそろ課題を再開するか。」

「英樹、数学のノート・・・。」

「深鈴に貸した。」

「なんとー?」

「ヤベヒー！ 僕も次あたるんだよー！」

「深鈴に言え。」

「ノートは授業中に俺に回してくれ。」

「わあつた。」

悠斗が深鈴の所に行つたのを見て、嘆息する。

「まつたく、次から次へと・・・。
さつさと課題を・・・。」

「よ～し、授業始めるだ。 全員席につけ。
教師が入ってきた。」

ヤベH・・・。 課題終わるのかよ、このペースで。
いいや、この授業中にやひひ。

「灘宮、今は数学だぞ。」

「スミマセン・・・。」

ダメでした。 義姉さん、期限までに終わるか怪しいです。

「チヨー、やつぱダメか。」

休み時間に突入し、開口一番そんな事を言ひつ。

「そりゃそつだろ。」

「おお、直衛。」

「それよりなあ、英樹。 お前、何人の事喋つてんだよー。」

「何の事だ？」

俺は意味がわからず首を傾げる。

「俺が好きな奴がいるって事だよ。」

「ああ。」

令郎が言つたよつとポンと手を叩く。

「覚悟はあるか!?」

言つが早いか、首を絞めてきた。

「イツ、武術をやつてるからマジでへる。
まあ俺もやつてみけど。」

「すんません、無いです・・・
つて言つたギブ・・・。」

さすがにこなりだつた為、首を絞めている腕を叩く。

「まつたく。お前に相談した俺が馬鹿だつたよ。
嘆息しながら放してくれた。」

「ゲホゲホ。

ようやくその事に気付いたか。愚か者。

色恋沙汰に無関心な俺に相談したのが運の尽きだつたんだよ。」

「お前、一応真剣に考えてくれたじゃん。」

「そついえば、軽音部に入つたんだよな?」

「そつだけど。」

「じゃあ、名前で呼んだりしてんの?」

『仲間』 だしあ。」

「あ～、いやまだ。

まあ確かに名前で呼ぶか。『仲間』だし。

ヤベ、とつとと課題を・・・。」

「あ、先生来たよ。」

「全員席につけ。」

「・・・。」

何これ。何なんだよこのタイミング・・・。

まあ、この授業中にでもやるか。

「ようやく――4できた・・・。」

グッタリしながら窓の外に広がる空を見る。

「英樹、さつきの現代文の宿題だけど、わかる?」
怜奈の言葉に、俺は膠着した。

「しゅ、宿題だと・・・?」

あえて言おう。課題やつてて気付かなかつた・・・。

ノートは取つたけど。」

「何やつてんのよ・・・。ギン。それともグハム?」

「どうちも御免だな。

宿題の内容、なんだつて?」

「これららの語の意味と、例文を書けって。」

「それくらいだったら辞書使えよ。
何で俺ばかりに聞くんだよ・・・。」

「その手があつたか。」

「いや気付けよ。」

さて、放課後になつたので部室に向かつか。

「遅れてゴメンな。」

そう言つて部屋に入ると、俺以外の部員が全員いた。
上級生なのに情けないな、オイ。
しかもケーキを食べてるし・・・。

持つてきてくれたムギには申し訳ないのだが、
俺は甘いものが苦手なので、それを唯に回す。
別にシスコンと言つ詰じやない。唯は太りにくい体质なのだ。
他の部員に食わせて太らせるのもマズイと想つたからだ。

「それで、ギターってどれくらいするものなの?」

「安くても5万ぐらいかな。」

「部費でおちませんか?」

「無理です。」

唯が一蹴されて落ち込んだ。

「さすがに無理だろ。

ついこないだまで廃部寸前だったんだる?」

「そつかあ。」

「じゃあ今度の休みにて、皆で楽器を見に行こうぜ。」
律の言葉に、全員頷いた。

さすがは部長。 頭を上手く纏めたな。

それに対して、この紅茶おいしけ。

「30分前つて珍しいのかな?」

「ど、どひじょう・・・。」

楽器を見に行く當日

俺は30分前に到着し、その後に来た澪と話していた。

なんか一方的な気がするけど。

律曰く、澪は恥ずかしがり屋らしい。

まあ俺もいつまでも女の子と2人きりは御免だな。
いい加減誰か来てくれないかな。

しばらくして、紬と律、そして遼祐が来た。
つまり、唯が、妹がまだ来ていなかつた。

付き添いしてやればよかつたのかも。しかし甘やかすのもマズイし。

そういうじている内に唯がやつてきた。
・・・。完璧に辿りついてあとどれくらいかかるかなあ・・・。

答え 3分と12秒

でした。

相変わらず犬を可愛がるな。

犬も唯に簡単に懐くので、余計に時間がかかるんだけどね。

「で、唯はいくらくらい持つてきたんだ?」

「お母さんに無理言って5万円前借した。」

5万円か。

どうせ誰の事だから何かに田移りするんだろうな~。

しばらく歩くと、律が俺を呼んでいた。

「唯が、洋服屋に行っちゃって・・・。」

「悪い。俺にも止められない。」

一度決めたら他の事が見えなくなる性質なのだ。

本当に変わらないな。

あの性格でそのまま大きくなつたのか。

今度幼馴染の和にお礼しておこうかな。

その後も様々な店を回つた。

アクセサリーショップ、ゲームセンター等々。

後輩に連れ回される先輩

つていつ題名で絵でも描こうかな。

漸く楽器の事を思い出し、店に向かつ。

澪がギターを選ぶのに重要な事を並べるが、唯当人は聞いていなかつた。

「このギター、可愛い。」

「25万円だとよ。」

「ええ～・・・。

さすがにこのギターには手が出ないや・・・。」

それでも中々ギターの前からは離れなかつた。

よっぽど気にいったんだな。

可愛いかどうかは知らんけど。

「アルバイトをしよう。」

そう言つた律に、唯は渋るが、これも軽音部のためだと言られて納得する。

「交通量調査か。順番どうある?」

「俺は交代しなくても大丈夫ですよ。」

遼祐が言う。

おお、さすがは男だな。

つて、俺もそうした方がいいよな。

「遼祐、無理しなくても俺がやるだ。」

「いえ、気にしないでください。」

「そう言つてくれるのはありがたいけど・・・。

そうだ、明日は俺が交代なしでやろう。」

「そうですね、それなら。」

「そんじゅまあ、やりますか。」

力チ 力チ

「・・・。」「・・・。」「・・・。」

力チ 力チ

「・・・。」「・・・。」「・・・。」

ん？　上のやり取りは何だつて？

遼祐と交通量の調査をしているだけだが。
どこか問題でもあるのだろうか？

ふと隣を見ると、緊張感がヒシヒシと伝わってくる表情をしていた。
なにもそんなに緊張しなくてもいいんじゃないかな？

確かに上級生だけども。

それについてもいい天気だなあ。

はて、遼祐はどう思っているんだろうか？
聞いてみるか。

「なあ。」

「は、はいー？」

明らかに緊張しているな、オイ。

俺ってそんなに怖いのか。

いつか、これを肝に銘じよ。うん、いつか。

「いい天気だな。」

「そ、そつすね。ここ最近地球は元気ですね。」

あからさまに不自然な返しだった。

話したくないのなら、そう言えばいいのに。

「そ、そうだ！　灘宮先輩つて・・・」

「英樹でいいよ。」

「へ？」

突然の事に、遼祐がすつとんきょうな声を上げる。
おもしろい奴だ。

「あの、だけど先輩ですよ？ それなのに下の名前でだなんて……。
」

「いいんだよ。 僕も遼祐と呼んでる訳だし。」

「あ、ああ……。なるほど。」
納得したように言つのを聞いて、内心ホッとする。
これで「無理です」とか言われたらどうしようとか思つてたし。

「んじゃあ、英樹？」

戸惑いながら遼祐が俺の名を呼んだ。

いや、それ以前に

「どうして呼び捨てなんだ？」

俺つてそこまで先輩として見られていないのか。

「いや～、その……。あれですよ。

同じ男同士ですし、それにたつた二人の男じゃないですか。
せつかくなんで……。」

まあ確かに一理あるとは思うんだが。

「悪い。 出来れば呼び捨ては勘弁してくれ。」

「じゃあ、英樹さん。」

「ああ。助かる。」

「あの、といひで唯とはいつ頃出会ったんすか?」

「ん~と、今から7年前だったかな。
元々家が近くて・・・。」

それからは唯の事で会話が続いた。

遼祐つて唯の事・・・。

まあ、俺にはあまり関係ないかな。兄つてのはただの肩書だし。

第2話 「軽音部」 了

第2話「軽音部」（灘面英樹Side）（後書き）

英樹

「ベースを忘れるとか、俺抜けてるな。」

鮮血

「妹の影響じゃない?
さすがはシステムなだけはあるよね。」

英樹

「違げえよー。」

それより、本当にあの課題はキツイです。」

鮮血

「まあまあ、いいじゃないの。
将来の為なんだからさ。」

英樹

「お前の設定の所為だろ? がー。」

第2話「楽器…そしてバイト!」（日暮遼祐の部）（前書き）

伝説

「し& amp; エ神曲だね。あと」「せんはおかずも」

遼祐

「うん、あれはよかったです。って言つたまやか」「ほんはおかずって本当にやるとは思わなかつた」

伝説

「俺も思つた。って言つたし& amp; エはバーードかと思つた」

遼祐

「うん、思つた」

伝説・遼祐

「……」

遼祐

「終わりー!?」

第2話「楽器…そしてバイト！」（日暮遼祐Side）

突然だが、俺は軽音部に入ったのだ！

理由は簡単！美女たちの願いを断れなかつたのさ！

……と、今思うと俺つていつたい何をやつているのだろうか。なんで部活を。

まっすます理解できない。ここまですると俺は果たして無事この高校生活3年間を過ごす事が出来るのか？

つて俺はなにそんな事で真剣になつてるんだ。たかが軽音部、部活だろ？そこまで必死になる事ないじゃん。

「そうそ、気にしそぎだよ」

と、俺の話を聞くと軽く受け流しやがつた俺の親友、門村浩史。

幼稚園の頃からの縁で、オタク仲間もある。

しかしそここまで聞き流すと俺はかえつて空しくなるぞ。

でも…… そちかもな。気にしそぎかもな。

「そりだよきつと

スマイル100%でそういうと同時に先生が教室に入つてきたので浩史は自分の席に戻つていつた。

授業が終了すると、鞄を持つて平沢と共に軽音部の部室へ向かおうと思つた時だつた。

なにやら先生に呼ばれて俺は平沢には先に部室へ行つてもらうつり言つて先生の後に続いて職員室へ向かつ。

ああ、なんで俺が別に美人でもない女教師に連れられて職員室へ行かなければならぬのだろう。

どうやら荷物持ちらしいがなんでそんな事を。誰か別の奴に回してくれよ本当に。

職員室に着くと、先生は自分の机にあつたプリントを俺たちの教室の教壇に置いて来いと言つ。

自分で行けよめんどくさい。だがそんな事を言えるはずもなく、俺は渋々プリントの束を持った。

失礼しました、と適当に言つて職員室のドアを閉めると溜息をついて教室まで逆戻り。

その途中だった。プリントの一枚が開いていた窓の風に飛ばされてしまつた。

「わっ、やべ！」

急いで取りに行こうと床に落ちたプリントを拾おうとする、誰かがそれを拾ってくれた。

2年生の女人だった。……女人？ 女の子って言つた方がいいだろ。

しかしその考えはその人を見た瞬間に納得する。
美人だった。いかにも大人な感じの人だった。

「これ、君の？」

「え、ああ、はい。ありがとうございます」

ふふふ、と微笑むとその人はその場を離れた。
あ～あ……せめて名前だけでも聞いときやよかつた。

教室に戻つて、教壇にプリントの束を置くと部室に向かつた。

部室のドアを開けるとまだ平沢達4人だけだった。
しかも全員ケー キ食べてるし。……つて美味そ。

「悪い、遅れた」

一言言つておくと、俺は自分の席に着く。

「何やつてたんだ？」

カチュー シヤ……田井中が質問してきたので、先生のパシリと答えながらフォークを持つてケーキを一口。

……うん、ウマイ！（てつれてれー）

あ、そういえば。

「灘宮先輩はどうしたんだよ？」

「まだ来てない」

ああそう。遅刻ですか。

まあしうがねえか。2年生だもん。色々と忙しいだらう。
と、噂をしていると灘宮先輩到着。

席に着くと、ケーキを唯に渡した。そつか、この人シスコンだった
のか。あはは、これは傑作だ。

「それで、ギターってどれくらいするものなの？」

「ああ、そういういえばギター買わないといけないんだ。
買つのか……金いるなあ。まあそこはいいとして。

「安くして5万ぐらいかな」

「5万……うわ、高けれ。

「部費でおちませんか？」

「無理です」

一撃必殺。唯の希望はあっけなく消えた。

つて言つた無理なのかよ。同時に俺の夢まで消し飛ばされたようだ。

「さすがに無理だろ。ついこないだまで廃部寸前だったんだろ？」

「いやそうだった。今の雰囲気だったらどう考へても廃部寸前だつたの！？」つて感じだからさ。

それにしても流石灘宮先輩。いつでも冷静だ。

「じゃあ今度の皆で楽器を見に行こうぜ」

律がそういうと、全員が頷いた。

樂器か……つて言つた、今思えば俺もだよな確か。

やれやれ、ちょっと交渉しなければいけないらしい。

「と詫う事でお金を下さご姉貴」

「…………はい？」

俺の姉貴こと、日暮雲紅は首をかしげる。

そんな首かしげる事か？

「どうしたの急に」

「樂器買つんだよ。軽音部入つたつて言つたろ？」

「ああ、そういえばそうだつたようなそりじゃなかつたよつな……」

「ぶつ飛ばされたいかこの人。

それでも俺は必死にこの怒りを抑え、話を続ける。

両親は、別の所に住んでいる。何故か。仕事が忙しくなつたので別々に暮らした方がいいからだ。

と言つ事でうちは俺と姉貴の二人暮らし。家事担当は俺で、金銭的な事は姉貴が担当している。

「ま、分かつた。8万ぐらいあればいいでしょ？」

「おお流石姉貴。ご褒美にハンバーグでも」

「わ～い、ハンバーグ大好き～！でもアンタはきら～い！」

「俺も嫌いだくそ姉貴～！」

仲がいいのか悪いのか。多分どころか確實に後者だろう。

キレるのを必死に抑えて俺はキッチンへ向かっていく。下剤でも入れといてやろうか畜生が。

だがせつかく楽器代てくれたのにそんな事は出来ない。俺は我慢して料理を作る事にした。

そして当田！

俺は待ち合わせの商店街のアーケード入り口に向かつてダッシュ中。いやだつてしようがないじやん。遅刻なんてしたくないし。かつこ悪いし。

そして待ち合わせ場所に到着すると、田井中、琴吹、秋山、灘宮先輩は到着していた。

やれやれ、なんとかビリは免れたか。そんでもまああいつに負けたらそれこそ色々とやばいだらうな。

「つたく～、遅いぞ～」

うるせえやい。ほつとけ。

腰に手を当てて俺を息子の様に怒る田井中にそり腰を尖らせて言つ。それにしても、残つた一人の平沢がいまだに来ない。……何をやつとんじやあいつは！！

「で、電話をしたほうがいいんじゃないのか？」

お、ナイスアイディア秋山。しかし何故うろたえた。少し気になつたが、俺はポケットから携帯電話と取り出そうとしたのだが、それは必要なくなつた。

その直前に来たのだと、平沢唯さんが。
だが！そこからなんだよ問題は。

その途中の横断歩道で同じく歩いていた青年にぶつかるわ、犬をなでなでするわ……何やつとるんだ。

ちなみに灘宮先輩によると、ここまでたどり着くのは3分12秒だつたらしい。

……何故数えた。よつぽどの暇人つすかあんたは。

「そうじゃない、性格的な問題だ」

「ああ、理解できたような理解できない様な答えつすね」

唯ははどうやら5万円を持つてきたらしい。はたして足りるのか？まあ大丈夫だろう多分。

「あっ！この服可愛い！」

おいこら。何のために来たんだよ。

と、俺の言葉を軽く受け流して店の中へ入つて行つてしまつた。

田井中は灘宮先輩を呼びに行くがどうにもならないとのこと。

……あいつは小さい頃からあんな性格だったのかな？だとしたら真鍋や灘宮先輩は非常に大変だつたろうな。

その後もこんな感じに色んな店に入つて遊んで……でも楽しかったよ。

特にゲーセン。

「あ～、また落とした～！」

平沢が嘆いているのを見て、つい俺の心の中の何かに火がついた。

ゲーム魂と言う奴か。ちょっと平沢をどかしてHFCキャッチャーの前に来ると小銭を入れる。

そしてアームをぬいぐるみの真下まで置くと、口元が緩む。

勝

つた。

結果は見事に俺の勝利。熊のぬいぐるみはコロキャラの景品取りだし口に吐き出された。

「つょうくんす」——「」

「ははは、まあざつとこんなもんだ！」

「なあ日暮ーあれ取つてあれ！」

「日暮くん、あのぬいぐるみを……」

田井中と琴吹の注文を快く了承し、見事に注文に応える結果を出した。

流石に、と言つか当然だらうか、灘富先輩は注文してこない。そりやそうだらう。

しかし秋山は何かつまらなさかつたな顔をしていた。……嫌われてるのかな、俺？

そしてよつやく本来の目的である楽器店へ。

ギターが並んでいる棚を見ると、これでもかと言つぐらいたくさんのギターが並んでいる。

と、その中にあるネックの部分が一つあるギターを俺は発見した。
……こんなものを弾く人間は果たしているのだろうか。カイ キー
ぐらいだろ。

「なんか、選ぶ基準とかあるのかなあ？」

たくさんあるギターを見ながら、平沢が呟く。その疑問を、秋山は解決してくれた。

「ギターって音色はもちろん、重さやネックの太さとか色々あるんだ。だから女の子はネックが細い方が……」

「あ、このギター可愛い！」

……聞け。聞いてやれよ。可哀想だぞ秋山が。

だがそんな事も気にせず平沢は明るめの茶色っぽいギターの前に座り込み、しばらくにじめつける。なんだこいつ、にじめつこが趣味なのか？

はてさて、このギター何円だろうか。

「そのギター25万円だとよ」

「うわああ、びっくり仰天玉手箱～。

「こりやあれだな。ステッペンウルフに入つて大企業にハックして色々とお宝を売りとばさないと買えないな。と、そんな事出来るわけがない。

「ええ～……。さすがにこのギターには手が出ないや……」

それでも中々ギターの前からは離れなかつた。よっぽど気に入つたんだろうな、平沢の奴。

「よし、みんなバイトしようぜー……」

ああ、なるほど。

「え～？！そんな悪いよ……」

「ま、いいんじゃね？俺は賛成だぜ。これも軽音部の活動つて事で3年間共に過ごすギター選ぶんだ。欲しくないの買つても、楽しく活動できねえだろ？」

そう付け加え、琴吹も灘宮先輩も賛成サイドに。いつもして軽音部は唯のギターを買う為にバイトをする事に。

しかし秋山は浮かない顔を。……バイトするのが恥ずかしいから？

それとも俺が賛成しちゃつたから？

アルバイトは交通量調査に決定した。

秋山が恥ずかしがり屋と言う事を配慮した結果らしい。流石律、よく分かつてらつしやる。

そしてそのバイト当曰。やつぱり俺が最後から2番目。なんだよ畜生！なんでいつもこうなの！？

まあいいさ。次は1時間ぐらい早く来てやるわ。

「順番はどうする？」

「俺は交代しなくても大丈夫ですよ」

男だしな、それにみんなと話がしたかったし。

まあみんなと言つか……つん、秋山と話がしたかったただけだ。

このまま嫌われたままなんて嫌だぜ本当に。

「遼祐、無理しなくても俺がやるぞ」

灘富先輩……なんて優しい人なんだ！

だけど、俺は自らの目的を果たすために遠慮した。

「そう言つてくれるのはありがたいけど……。そうだ、明日は俺が交代なしでやろう」

「そうですね。それなら」

「せんじゅまあ、やりますか」

「うして、俺たちのバイトが始まった！」

「……」「……」

力チ 力チ

「……」「……」

力チ 力チ

なんだよこの状況は。

いや、まあうん。分かつてるよ。全員としなきゃいけないって言つたら灘富先輩としなきゃいけないのぐらいで分かつてますよ。でもーーなんだこの空気。

確かに、灘富先輩つてなんとなくからみにくいと言つか、[冗談が通じなさそうと言つますか……。

隣をちらつと見るとカウンターを回している灘富先輩。……なんか、妙にギャップが激しいんっすけど。

はあ……早く終わんねえかな。なんかすっげえ氣まづい。

「なあ」

「は、はい！？」

やべえ、明らかに不自然だ！確實にバレてるよ、俺が灘宮先輩の事警戒してるのバレてるよー。

あ～、どうしよ～……やっぱ氣まずいよ～……。

「いい天気だな」

まさかこの人の口からそんなメルヘンな言葉が出るとは。メルヘンって言うか、とにかくなんかギャップを感じてしまつ。

「そ、そうですね～。ここ最近地球は元氣ですね」

なんだこの答え。どう考へてもアホだ。ヘキサゴンにでも出でるよ。不自然すぎる、もうダメだ。早く時の女神さよよ、時間を早送りして～！

……ダメだ。逃げるんじゃない！何か、何か話題を作るんだ！

そうすればこの気まずい雰囲気から脱出する事が出来る！

だが何を言えばいい……そうだ！唯だ！

え？なんで名前で呼んでるかつて？さつき唯と一緒にこれしてる時に名前で呼んでいいよって言われたからだ。

ちなみに秋山以外の軽音部員全員も名前で呼んでと言つて来た。俺は喜んで了承した。まあそこはいいとして。

確かに唯はこの人と幼馴染！つまり色々と唯の事を知つている！

……なんで唯の事が気になるのだ。まあそこはいいとして。

「そ、そうだ！灘宮先輩つて……」

「英樹でいいよ」

「……へ？」

自分でも分かるぐらいいな間抜けな声。笑わせるよ。きつとこの人に面白い奴だつて思われてるよきつと。

「あの、だけど先輩つすよ？ それなのに下の名前でだなんて……」

いや、本当は名前で呼びたい。灘宮つて言つにいくんだ正直。

だけどなあ……どうにもこの人が……。

「いいんだよ。俺も遼祐と呼んでる訳だし」

ああ、そういうえばそうだった。

……まあ、いいか。

「んじゃあ、英樹？」

「どうして呼び捨てなんだ？」

まずかつたか。やっぱり油断して調子に乗りすぎた！
だが俺はなんとか理由を作る。

「いや～、その……。あれですよ。

同じ男同士ですし、それにたつた一人の男じゃないですか。せつ
かくなんで……」

「悪い、出来たら呼び捨ては勘弁してくれ
ですよね」。

「じゃあ、英樹さん」

「ああ、助かる」

ホツ、と胸を下ろす。

なんか緊張してしまつていたが、灘宮先輩を英樹さんと呼んだ瞬間、
緊張感が消えた。

なんで俺この人を警戒しちやつてたんだろう。別に悪い人じゃない
だろ。

まあそこはいいか。

「あの、ところで唯とはいつ頃会ったんですか？」

「ん～と、今から7年前だったかな。丁度家が近くで……」

それから唯と英樹さんの過去話で話が盛り上がつた。
別に俺があの場にいたわけでもないのになんか、すついぐ面白かっ
た。

英樹さんつてお話し上手なんだな。そう思つた。
さて、後は秋山だな。……頑張りますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472m/>

けいおん！Cross of Lives!

2010年10月9日20時28分発行